

『就実論叢』第48号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2019年2月28日 発行

幼稚園の食事場面における
保育者の食事援助観と座席位置
— 4歳児との共食場面に焦点を当てて —

**The Relationship of a Teacher's Choice in Sitting Location During Mealtime to the
Teacher's Awareness of the Kindergarteners' Condition
: A Focus on the Lunch Scene with 4 year old Children**

伊 藤 優

幼稚園の食事場面における 保育者の食事援助観と座席位置

— 4歳児との共食場面に焦点を当てて —

The Relationship of a Teacher's Choice in Sitting Location During Mealtime to
the Teacher's Awareness of the Kindergarteners' Condition
: A Focus on the Lunch Scene with 4 year old Children

伊 藤 優 (幼児教育学科)
ITO Yu

キーワード：幼稚園、弁当場面、4歳児、食事援助観、座席位置

1. はじめに

近年、保育施設における共食の重要性が指摘されている。幼稚園教育要領や保育所保育指針においても、他者と一緒に楽しく食べることが強調されており、これに伴い多くの他者と共に食べる保育施設の食事場面が重視されている。

共食について、保育施設の食事場面における子ども同士のかかわりを検討している外山(2008)は「ともに食べ、それによって集団の共同、連帯を確認する意味をもつもの」としてとらえている(以下、共食の定義はこれに準ずる)。平成20年に改訂された幼稚園教育要領や保育所保育指針では「食育」に関する事項が追加されており、このような記述は平成29年改訂の幼稚園教育要領や保育所保育指針でも変わらず記載されている。

集団で食べるお弁当場面は友達とのコミュニケーションの場であるとともにマナーやルールなどの制約が存在する場でもある。このような集団で食べるお弁当場面について、外山(1998)は2歳児クラスと4歳児クラスの子どもの達の食事場面での席決め行動に着目し、そのやりとりを分析した。その結果から、4歳児クラスの子どもの達の食事場面での席とり行動と仲間関係との関連性について言及している。4歳児クラスの子どもの達はそれ以前の子どもよりも仲間関係が強固なものとなる一方で喧嘩なども増える時期であり、そのような仲間関係が食事場面での子どもたちの座席位置に表れやすいのではないかと推察される。

食事場面において、保育者は子どもと同じように食事をし、マナーやルールを守り、一緒にコミュニケーションをとる。つまり、保育者も子どもも同じ食事の主体者であり、共食者である。一方で、食事場面は、「食べる」や「楽しむ」、「学ぶ」という概念に関連性を持たせることは難しく、保育者にとって子どもとの関わりにジレンマや困難さを感じやすい場面

である（伊藤，2013）。そのため、保育者は自身の食事援助観をもとに、その時々に応じて子どもにかかわりながら食べている。先行研究から、食事援助観と声かけなどの子どもへの直接的な働きかけの関係性は明示されている（中澤・鍛冶・石井，1995）。加えて、保育者が同じ物を食べているだけでも子どもに与える影響は大きいことも報告されている（Addressi, Galloway, Visalberghi, & Birch, 2005）。つまり、保育者の直接的な子どもへの働きかけ以外の行動も含め、食事場面での保育者の行動を検討する必要があるだろう。このように、保育者を子どもと同じ共食者として捉え、食事援助観と保育者の間接的なかわりも含めた食事場面での行動との関係をとらえることが、保育施設の食事場面で保育者が子どもとともに食べることの意味や保育施設の食事場面を通した保育者の専門性について明示化することにつながるのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究では食事場面において保育者がなぜその席に座ったかという席決めの意図をインタビューで明らかにすることを通して、保育者が保育施設の食事場면을どのように捉えているのかを明示する。

その際、特にお弁当場面は給食場面と比べ、保育者の配膳や片づけが必要なく、保育者は子どもと一緒に食べることができる。つまり、幼稚園の弁当場面において、保育者と子どもは共に食事を行う共食者の側面が強いといえる。そのため、本研究では、幼稚園の弁当場面を観察対象とする。

2. 方法

(1) 対象：観察対象であるF幼稚園の年中クラスの子どもたちは全員で29名（男児17名、女児12名、内3名が9月に転園）であり、担任保育者Hは副担任保育者Mとともに子どもたちとかかわっている。F幼稚園では、近接した森で昼食を食べることが多かった。

(2) 観察方法：観察期間は2013年6月上旬から12月上旬にかけて、週1回の頻度で観察を行った（全16日）。観察時間は保育者が「お弁当食べようか」などとお弁当場面への移行の声かけをしてから、クラスの中で最後の一人が「ごちそうさまでした」と言い、お弁当の片づけを終えるまでの間とした。

(3) インタビュー方法：本研究では、F幼稚園年中児クラス担任の幼稚園教諭（保育者H）にインタビューを行った。インタビュー時期は、2013年10月15日と12月3日である。インタビューの際には、観察から得られた子どもや保育者がどこで食べていたかがわかる図（「座席位置図」とする）とその時の保育者Hと子どもたちの食事風景の写真を用い、その日の特徴的な出来事や活動などをもとに、インタビューを進めた。インタビュー後、保育者Hの語りを逐一文字化して、1日毎にエピソードを作成したところ、16件のエピソードが生成された。

具体的には、(1)保育者の食事援助観（子どもと一緒に食べる際、気を付けていることや大切だと考えていること）について、(2)座席位置図（図1）及び写真を提示しながら、保育者が座る場所を決めた理由や、子どもの座席位置を見て気づいた点などを尋ねた。

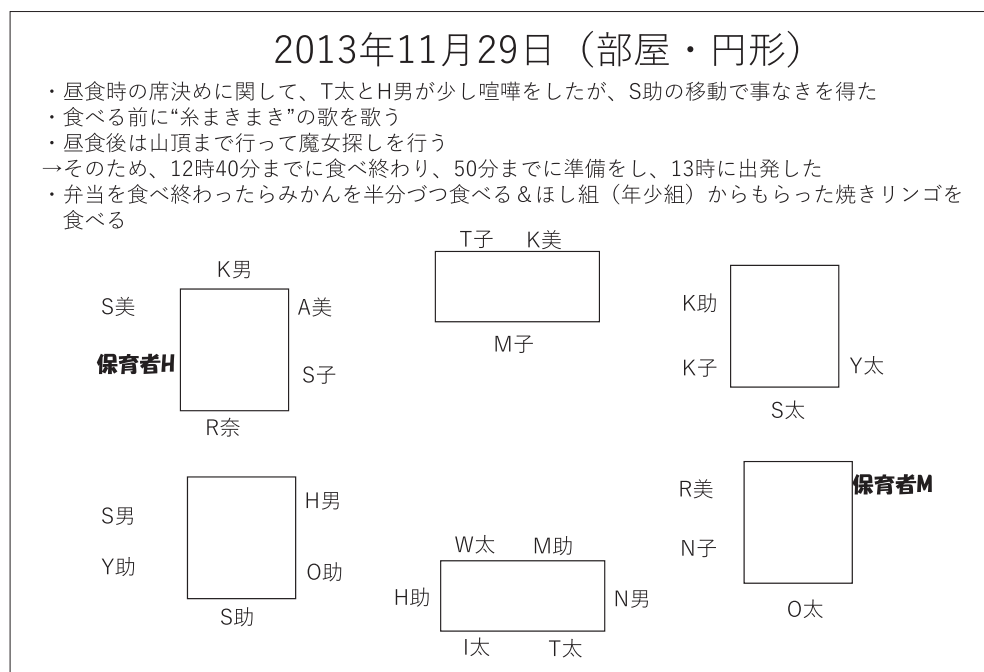


図1 座席位置図の例（11月29日分）

3. 結果と考察

(1) 保育者の食事援助観

まず、「食事場面で子どもと一緒に食べる際、気を付けていることなどがあれば教えてください」という質問内容に関して、保育者Hは楽しく食べられるような雰囲気を作るよう配慮をしていることや、もうすぐ年長クラスになるため、マナーなども教えていくことに気を付けていると述べていた。また、サンドウィッチパーティーやおいもご飯パーティーのようなお弁当以外のものを食べる際にはアレルギーの子どもへの対応の難しさについても語っていた。

(2) 保育者が座る位置について

次に、座席位置図および写真をもとに、「なぜここで食べたのですか」という保護者の座る位置に関する内容の質問を行い、表出されたエピソードを分類したところ、①子どもに呼ばれた場所に座った、②全体が見える場所に座った、③気になる子どものそばに座った（座らなかった）、という3つに大別された。

①子どもに呼ばれた場所に座った（3回／16回）

事例①-1（9／14）

「このときはK男が呼んでくれたのかな」

事例①-3（9／29）

「この日はS美が呼んだんよ。でもそのせいでR奈がおいだされちゃってね」

事例①-2（11／29）

「S美がよく呼んでくれるんですよ。この日もS美が呼んでくれたんですよ」

全16回の観察場面の内、3回分の観察場面において、保育者Hは子どもが「一緒に食べよ」と呼んでくれたからその場に座ったと述べていた。

②全体が見える場所に座った（2回／16回）

事例②-1（9／26）

「机を出すのが面倒臭くなったのでホールで。（中略）端っこで全体が見えやすいように…。安全のためにもね。最低限子どものことがみえるように座ったかな」

事例②-2（11／8）

「このときはM先生いなかったからね。このときはちょっとあえてね、どこにも入らずに一歩引いて…。どっか入るとこっち来てってなって、子どもたちとの会話がはじまっちゃうからね」

全16回の観察場面の内、2回分の観察場面において、保育者Hは子どもと話をするというよりも、全体が見えるような場所に座るようにしたと述べていた。その理由として、事例②-1は運動会の練習の片づけで保育者Hはお弁当を食べながら子どもと十分にかかわる時間があまりなかったため、最低限子どもたちの安全への配慮から全体が見える位置に座るようにしたと述べていた。また、事例②-2は副担任である保育者Mが休みだったにも関わらず森でお弁当を食べる日であった。そのため、グループの中に入ると子どもたちの会話に集中してしまうため、あえてどこのグループにも入らず、全体が見える位置で弁当を食べるようにしたことを述べていた。

③気になる子どものそばに座った（座らなかった）（11回／16回）

事例③-1（7／9）

「この日はね…やっぱS子ちゃんかな。S子ちゃんがお弁当で嫌いな物があって『食べたくない』って来たからね。一緒に食べようと思って」

事例③-2 (9/17, 9/20)

「この頃はB男、A子、M美が転園するので、ここらへんは意識していたと思います。できるだけ一緒に食べようと思って」

事例③-3 (9/24)

「S太がぺんぺんご飯というかおむすびにしてもらっていなかったの、食べる量が少なかったり遅かったりしたから見に行こうかなと思って」

事例③-4 (10/1)

「この頃からI太が変わってきたんですよ。親しみを込めた感情を出してくれるようになったの。保育者冥利につきるんだけど、『H先生～』とか今までちょっと照れ隠しとかあったんだけど、このころストンと抜けてきたのかな。『H先生、H先生』ってよく言ってくれるようになって…。だからI太君のそばで、がつつきかかわっていきなと思って。(中略) I太君とのかかわりを持ちたいなと思って」

事例③-5 (10/4, 10/11, 10/22, 10/24)

「この辺りはずっとN子ちゃんが気になって。ちょっとね、感情をうまく出すというところに課題があるなと思うので。割と我慢するんですよ。『誰と座りたい?』って聞いても『私は誰とでもいい』って言ってしまいがちなので。『N子ちゃんの思っていることをそのまま言っていんよ』っていうことをよく言っていて…。それで一緒にいるんだと思います。ちょっとチックまではいかないけど、目をぎゅっとすることがあるので、気持ちを十分出せていないところがあるんだなと思って。やさしいからね、どうやって出していいかわからないんだと思う」

事例③-6 (10/29)

「これはね、S太が運動会の前後、秋休みの後も、やっと出せるようになったというか、母子分離に時間がかかったというか、お母さんを離さずに大泣きするんですよ。私が抱えて部屋に入るって言う…大泣きをするのがずっとかれこれ二週間、三週間…。最初のころから泣きたかったと思うんだけど、泣きたくても我慢していたのがようやく秋ぐらに出せるようになった。秋くらいから出せるお子さんとそうでない子どもさんといろいろあって。(中略) この頃はだんだん落ち着いてきたんですよ。S太は一生懸命友達に話しかけようとするけどあんまり声が大きくないから、相手も僕に言っているのかわからないっていう感じで…それで自分は言っているけど聞いてもらえない、悲しいから言えないっていうのが続いたけど、このときは自分から入って行ったんですよ！それで何を話すんだろうっていうのが気になって気になって…。で、ここに入りました。本当にこの会話が聞きたかったんです」

事例③-7 (11/14)

「この頃からO太君の話すピントが合ってきた。(中略) ふわふわしていたO太がきちんと相手の目を見て聞いている。こういう時はあんまり近くに先生がいてもいけないからね…」

全16回のうち、11回分の観察場面において、保育者は気になる子どもの近くに座って食べるように積極的に自分から座る位置を考えて食べていた。

気になる理由として、事例③-1や事例③-3のようにお弁当に嫌いな物が入っていたことや、食べる量や食べる早さ等について挙げられた。一方で、事例③-2、事例③-4、事例③-5、事例③-6のように普段の生活の中で気になった子どもとかかわりを持ちたいため、近くに座ることも多かった。

事例③-2は転園する子どもとかかわりをできる限りもちたいという保育者の思いが食事場面の保育者の座り位置に表れたと推察される。事例③-4は、クラスでもボス的な存在で他の子どもと比べて保育者に甘えることが少なかったI太が、この時期になって「H先生～」と保育者Hに感情を表すようになったことを述べていた。このようなI太の変化を保育者Hもうれしく感じており、食事場面でよりI太との関係を深めるためにI太の隣に座ったことが示された。

また、10月に入ってから保育者Hは、自分の言いたい気持ちを我慢しがちなN子のそばによく座り、ご飯を食べていた(事例③-5)。N子は食べる席を決める際も自分でいきたい席を決められず、みんなを待たせてしまうことが度々あった。その都度、保育者HはN子の気持ちを聞かすが、その際もN子は自分のいきたい席を自分の口から言えない様子が続いた。このような場面は食事時に留まらず日常の様々な場面で見られた。さらに、この時期はN子に目をぎゅっと閉じる様子が頻繁に見られたことから、保育者HはN子と食事場面を通して関わりを持とうと積極的に昼食と一緒に食べるようにしていたと語っていた。

事例③-6において、保育者HはS太と友達との会話に興味を持ち、一緒に昼食を食べようとしていた。S太は4歳児クラスからの入園児であり、4月に我慢していた母子分離によるさみしさを運動会前後でようやく表出させ、登園時に母親と離れる際には大泣きを繰り返すようになっていた。S太は声が小さくぼそぼそと話すため、聞き取りづらく、観察中も友達と会話が成立することが比較的難しい様子が見られた。事例③-6では母子分離による大泣きも落ち着いたころ、普段友達に自分から積極的に話しかけないS太が、クラスのボス的な存在であるI太に自分から話しかけ、一緒に食べようとしていた。このような状況に対し、保育者HはS太が食事場面で何を話すのか聞きたいという思いから、S太と一緒に食べることにしたと述べていた。

このように、保育者は子どもたちと一緒に食べる際、食事場面での子どもの気になる行動に留まらず、日々の生活で気になる子どもたちの様子を捉え、気になる子どものそばに座っていた。一方で、事例③-7において、保育者Hはあえて気になる子どものそばに座っていない。事例③-6のS太と同じようにO太も4歳児クラスからの入園児であり、9月にS太と同じように登園時に大泣きを繰り返していた。しかし、その大泣きを経験したことで、“ふわふわしていた”O太が話している相手の目を見て、よく聞き、相手の質問に添った応答ができるようになってきたことを保育者Hは語っていた。そのため、この時期に、自分がO太の近くに座ることで、O太の甘えを引き出さないように、保育者HはあえてO太のそばでは食べないようにしていたと語っていた。

4. 総合考察

食事場面で子どもと一緒に食べる際、気を付けていることを尋ねると、保育者はマナーや楽しく食べる雰囲気作りへの配慮について述べていた。このような配慮は保育者の座る位置からも推察された。たとえば、子どもに誘われた位置に座ることは楽しく食べる雰囲気作りにも大きく関わり、全体が見える位置に座って食べることにより、全体を見渡し、安全面への配慮及び立ち歩きや箸の使い方などのマナーが把握しやすいであろう。このように、保育者は自身の食事援助観に基づき、援助しやすいように座る位置を選択していたことが示された。

一方で、保育者は食事場面を生活全般の中での気になる子どもと関わる機会、食事場面での子どもの会話を通して子どもたちの状況について知る機会として食事場面を捉えていることが示唆された。食事場面は一日の一場面であるが、子どもと一緒に食べながら話したり、子どもを観察する時間を十分に確保できる場面でもある。保育者は食事場面を子どもたちの栄養摂取の場としてとらえているだけではなく、その日の子どもの様子をみとり、次につなげる場としてとらえ、それが保育者の座る位置にも表れているのではないかと推察される。

最後に、今後の課題を以下に示す。本研究では週に1回約半年間にわたって観察を行ったが、時期によっても座席位置に変化が見受けられた。今後は、時間的変容の視点も踏まえて検討する必要があるだろう。また、保育者の食事援助観の違いや担任・副担任という役割の違いが座る位置に影響を与えることもあるであろう。以上のことも踏まえた分析を行うことで、保育施設の食事場面から保育者の専門性を明示することができるのではないかと考えられる。

引用文献

- Addressi, E. , Galloway, A. T. , Visalberghi, E. & Birch, L. L. (2005) "Specific social influences on the acceptance of novel foods in 2-5-year-old children", *Appetite*, 45(3), 264-271.
- 伊藤優 (2013) 保育所の給食場面における保育士の働きかけの特質. *保育学研究*. 51 (2), 63-74
- 中澤潤・銀治礼子・石井恭子 (1995) 幼稚園教師の食事場面における援助の分析—子どもの発達と教師の保育観—. *保育学研究*. 33 (1). 59-67.
- 外山紀子 (1998) 保育園の食事場面における幼児の席取り行動：ヨコに座ると何かいいことあるの？. *発達心理学研究*. 9 (3). 209-220.
- 外山紀子 (2008) 発達としての共食—社会的な食のはじまり—. 新曜社

